

## ドイツからの手紙

茗溪塾塾長 宇野 雅春

夏休みに入る少し前に、近くに住むMさんの孫Sくんがドイツから遊びに来るということで、相談を受けました。小さい頃に我が家の子供たちとも遊んだことがあり、今は高校生で日本語はそれなりに話せるとのことでした。Mさんは80歳をだいぶ過ぎているのに未だ元気でテニスのシニア大会で全国を回ったりしています。何の気なしに、大学進学にそなえて予備校の夏期講習などはどうだろうか誘ってみました。特にMさんは奥さんを亡くして久しく、あちこち連れて行くことも大変でしょうから、夏期合宿などもいいのではないかと尋ねてみました。「志賀高原」を経験できることや、食事などの面倒もないのでは?という気持ちでした。軽い気持ちで提案したのに、Sくんのお母さんはとても興味をもった様子で、そこから何度か国際電話で、話すことになりました。お母さんは日本人なので、特に言葉が大変だったわけではありませんが、何しろ、全く知らない日本の高校生と短期間で仲良くなれるのかということや、日本とドイツの学問の内容やレベルの違いなども不安なようでした。私の方も不安はありましたが、こういうことはなるようになるもの!と達観して話を進めました。思ったより私が示したこの「勉強を日本でする」という方向性は本人も興味を示したようで、4タームの「現代国語」と「化学」の授業への参加と「合宿」への参加が決まりました。

初めてMさんと一緒に塾に挨拶に来たS君は、髪は黒いものの全く見かけはドイツ人でちょっと身構えましたが、「お手数をおかけします」と日本語ではっきり言われてほっとしました。この子なら大丈夫!という実感を持ちました。案の定、4タームの授業が始まるとすぐ生徒たちに溶け込んでおしゃべりなどもしていました。

全く特別扱いをしなかったので昼休みなども一人でさっさと昼食なども済ませていたようでした。一番心配した「現代国語」の授業が彼には特におもしろかったということでした。化学も最初は日本とドイツの違いに戸惑ったようでしたが、後でそれほど違わないことがわかったようです。

そして夏期合宿、英語は全体でトップ(100点)の実力をを見せてくれました。折悪しく合宿の最後はインフルエンザでんやわんや、合宿から帰ってすぐ挨拶に家に来たということを聞いた時には、Sくんはすでに、ドイツに帰国していました。

しばらくして、9月も中旬の頃、お母さんからお手紙をいただきました。そこには、すぐ雰囲気になじめたことや有意義だった事への感謝が述べられていました。特に合宿での集中勉強にふれ、「やればこんなにできる」と本人も驚いた(ドイツではそういう機会はない)ということ。自分を発見する貴重な経験であると同時に、ドイツとは違った考え方、生き方に短いながらもふれることができたのは幸運なことですと書いてありました。

一度私の家に遊びに寄ったSくんは、ピアノで「アメリカのテーマ」やイギリスのロックバンドの曲を恥ずかしそうにひいたりして、世界中高校生は皆同じという感を私に持たせてくれました。ベートーベンの第9の歌詞を読んでもらったりはさすが本物のドイツ語と感心しましたが、達者な日本語からは、むしろ日本の高校生とどこが違うのか?という印象の方が強く残りました。でも、お母さんの手紙には「ドイツに帰国してすぐ徴兵検査の通知があり、意外にも第2種合格」と書いてあります。東西の壁崩壊の後軍隊の規模は縮小されているとの事ですがアメリカと同じくドイツにも徴兵制があります。S君は幼いころ交通事故にあい、足に障害があるということで、お母さんの方は不合格だろうと思っていたとのことでした。兵役に就くか、徴兵拒否して一年間の開発途上国の社会奉仕をするか、Sくんは将来の方針とも関係してくる重大な決断にせまられているようです。

いずれにしても大学進学が一年遅れるということですから、そこには日本とドイツの全く違う社会体制というものがあります。遠く世界を見渡せば、もっと多様な現実が世界の子供達を取り巻いているということなのです。憲法9条で戦争放棄をうたっている日本人の感覚からは「兵役」はやはり重く感じられてしまいます。大人の階段を上るとのことの厳しさと、そこを過ぎる青春の「重さ」を、「ドイツからの手紙」は物語っているように思いました。